

観点からつかむ点では今年の解析においては十分にできていると思っている。一つの側面だけを見ることは危険であるし、もちろん対流との関連をみる上で、飛行機、人工衛星などあらゆる観測手段を使わなければならない。

山本(東北大理)：今のお話は GARP を推進している立場の私としては大変うれしい。

安田(名古屋気)：吉田さんに聞きたいが、今まで前線波動論的な話と、対流を考慮した摩擦層の収れんによる話があったと理解した。前線波動論的に考えると土佐沖低気圧のほか、梅雨末期の小さな低気圧も含めて考えるべきである。今後の理論的な進め方として、どちらの方向にウエイトをおいてアタックされるかおうかがいしたい。

吉田(気象庁電計)：今の段階では、対流をラージ・スケールのスタビリティに入れる例はごくわずかしかない。しかし、もしルーティンに対流を入れてみると、その効果があるいは効きすぎて、できなくてもよい低気圧ができるかも知れない。経験を積む必要があり、私は水蒸気量をなるべく正確に扱う方向が正しいと考える。

座長：予報部長として北岡さん何か総合的にございま

せんか。

北岡(気庁予報)：あるフローパターンになると、日本列島の影響で黒潮などの海流を含めて前線が発生しやすい。土佐沖の袋小路のようなところに渦が発生し易いとも考えられる。このような地形の影響を力学的にどう表現してよいかわからないが、経済面も含めて、これからどうアタックするかきめなければならない。

山本さんの言われたように、実際がどうなっているかを知る観測のために海上のネットをふやすことも必要だが、その前に現在得られる資料から解析的、統計的に調査をして、もう少し問題を掘り下げてみる必要がある。

座長：雲物理の立場から磯野さんいかがですか、

磯野(名大理)：土佐沖低気圧を観測したことがないので雲物理としては意見がないが、小倉さんからも出たように物理的な現象間の関係をはっきりさせることが必要で、このためには実体を明らかにすることが先決である。そのときに雲物理的観測を行なう必要がある。

座長：果てしない道に迷いこんで日暮れて道遠しの感がありますが、時間が来ましたのでこの辺で。

(速記取りまとめ担当・西本清吉、駒林誠、村山信彦、安田清美)

＝新刊紹介＝

独標に祈る (西穂遭難追悼文集)

昭和42年8月1日に松本深志高校の生徒が落雷のために西穂高独標で遭難、11名が死亡、13名が重軽傷を負ったことは我々の記憶に新しいことである。同高校では将来再びこういうことを繰り返さないための記念事業として、慰霊碑の建立、追悼文集の刊行、調査報告の刊行を計画された。そしてその「追悼文集」が上記の題名で昭和43年8月1日、ちょうど遭難1周年に発行された。

全体はA5判484ページ、ほかに写真判56ページの大きなもので、第1部悲劇の記録、第2部、面影をしのぶ、第3部西穂落雷遭難調査報告概要となっている。第1部(152ページ)と第3部(78ページ)を通読して感じたことは、分担執筆された同校の先生方が、つとめて客観的な記録を後世に残そうとして苦心されている気持ちが紙面ににじみ出ていることである。そしてリーダーの先生方の判断や行動の記録はありのままを詳細に記し、問題点は問題点としてさらけ出して、謙虚に批判を受けようという態度であるのが気持ちがいい。そしてこの大きな書物を1年間で印刷刊行された関係者の努力に

も敬服する。

「調査報告」は昭和44年3月末を目標として目下準備中の由であるが、この「追悼文集」だけでも事故の概要はわかる。ことに西穂稜線上におけ当りの日天気変化の様子は、第1部の中の「運命の雷撃」(引率教師と同行生徒の手記)に詳しい。人体への落雷被害は、こういう書物の性質上ことさらに簡略化されたものと思うが、将来刊行予定の「調査報告」ではそういう資料と、またそれと関連して所持品関係の被雷資料も十分に収録して貰いたいと思う。興味のある記載を引用すると、「また背中のザックの中のカメラ、水筒、食器等にはげしい電流痕跡があつて、かえって上半身を守られて助かったのではないかと思われる例もある」とある。

購読希望の向きには実費800円(荷造送料100円)で頒布できるそうであるから、希望者は松本市蟻が崎3の8の1、松本深志高等学校あて申込まれるがよい。

(畠山久尚)